

京都の街と川

堀川は平安京造営時に周辺の小河川を改修してできた運河が起源と言われている。平安のころ、川は北山から切り出された木材の運搬や、都に立ち並ぶ貴族の邸宅に水を引き込むことに使われた。以来、時代がくだるにつれ、農業用水として、また、織物産地として名高い西陣が沿川にあることから「友禅流し」が行われる川として様々に利用されてきた。

ところで京都の街は、堀川はじめ桂川、鴨川、高瀬川など大小様々な川が流れ、その恩恵を受ける一方で、これらの川が氾濫し、度重なる水害に悩まされてきた。このような水害から街を守るため、堀川についても水害対策が施され、戦後、昭和20年代から30年代にかけて「浸水対策事業」が実施された。その結果、下水道の整備とあわせて合流式下水道の雨水放流先として堀川は位置付けられ、普段は水が流れないコンクリート張りの水路となった。

堀川と下水道

「京都市は淀川中流域にあり、京都市で処理された水は淀川に入り再び下流の大阪などの都市で使われます。そのため、良好な水環境を維持して下流域の汚濁を削減することは重要な課題です。その一つとして合流改善に取り組んでいます。堀川が流れる京都市中心部についても合流改善を進めており、堀川の清流復活にあたっては合流改善事業、浸水対策事業の一つとして進められた堀川中央幹線建設事業が大きな役割を果たしています」こう話すのは京都市上下水道局下水道部計画課の宮原企画係長だ。「堀川へは合流式下水道の雨天時放流水が5か所の吐口から流出していましたが、堀川中央幹線の整備により雨天時放流をする必要がなくなり吐口を塞ぐことができました」と続けるのは谷田事業係長。

堀川の清流復活では、大規模な下水道施設が大きな役割を果たしていることを知った。

市民の声を生かした川づくり

「京都では川に向かって納涼の座敷が設けられるように、この街に暮らす人々は昔から川を日々の生活の中に取り入れてきました。この歴史、文化を背景に、京都市では川が醸し出す景観を生かしたまちづくりを進めてきました。そのような中、堀川については、地域に暮らす人々から清流を復活させたいという声が多数あがり、堀川水辺環境整備事業がスタートしました」と説明するのは、京都市建設局土木管理部河川整備課の中山主任だ。

整備にあたっては「市民とのパートナーシップ」を市政運営の中心に据えていることもあり、地域の市民の声を事業に反映するために市民参加のワークショップを2000年から2001年にかけて開催したという。中山主任は続ける。「ワークショップを成功させるため、地域代表、行政、学識経験者による実行委員会を組織し、そこが中心となりワークショップを企画、運営しました」

市民参加を募ったことで事業が完了してからも、この景観を守ろう、この景観を生かして街を活性化させようという動きが生まれ、市民が中心となり堀川の親水空間を生かしたイベントが企画されているという。

京都市の河川整備方針を記したパンフレットの冒頭に「川とは、その都市の『品格』を示すものの1つです」との一文があった。堀川の水辺からは歴史や文化、そして川を大切にしたいという京都の人々の思いが伝わってきた。



左、堀川の清流の始まり。水は第二疏水分線から引き入れられる（賀茂街道紫明付近）、中央、堀川通りの中央分離帯の中を流れる（堀川紫明付近）、右、川べりは街中のちょっとした憩いの場になっている（竹屋町橋付近）